

## 2023 年度強化活動総括

2023 年の強化活動は、2024 年パリオリンピックローイング競技へ（以後 パリ大会と略す）の出場権獲得及び上位進出への足がかりを作ることと、次世代のオリンピック日本代表選手を育成するシーズンと位置付けられていた。そのため、Vision として、競技力、普及、ガバナンスの全ての面で世界の強豪国となり、世界レベルでの大会における Final A 進出を目指し、最初のクォリフィケーションである 2023 年世界ローイング選手権（以降世界選手権と略す）においてパリ大会への出場権を 1 種目以上獲得し、最終的な目標であるオリンピックでのメダル獲得へ向けての足がかりを作る。同時に、アジアにおける確固たるプレゼンスを達成するために 2023 年アジア競技大会ローイング競技（以降アジア競技大会と略す）で、前回大会を上回るメダル獲得を目指す。また、タレント発掘育成事業を強力に推進することで次世代のオリンピック選手の育成を行うことを掲げた。

2023 年世界選手権においては、M1x がパリ大会への出場権を獲得するという歴史的な快挙を成し遂げたが、これまで重点強化を行ってきた LM2x、LW2x が共にオリンピック枠獲得レベルに達していないと判断され派遣を見合わせる事となった。ここでは、2022 年 12 月 15 日付「2023 年シーズン強化方針」（JARA 発第 2022-289 号）にて掲げた方針に沿って総括する。

### 1-1 日本代表選手及び所属団体における強化メソッド実施

代表選手及びその所属チームにおける強化メソッドの実施については、所属チームからの合宿、遠征時のサポートコーチ派遣が増加したことや、所属チームとの定期的なミーティングにおいても代表合宿で行っているトレーニング状況を説明する機会も活用し、例年以上に所属チームと強化メソッドについての情報を共有することができた。引き続き、切れ目のない強化活動を行えるよう推進していく。

### 1-2 代表チームの識別

これまで、ナショナルチームチームを、世界選手権への派遣クルーを中心に強化を行ってきたが、日本全体の強化のための強化体制を拡充させることを目的とし、ナショナルチームチームを A 代表（オリンピックローイング競技、世界選手権に向けた強化を図る）、B 代表、C 代表（未来の A 代表となるべく次世代育成選手に日本代表として国際大会を経験する機会を創出し継続的な強化を図る）に識別しその目的に沿った代表活動を行った。また、各所

属チームに代表チーム活動にご理解・ご協力をいただき、サポートコーチの派遣や合宿・遠征等にかかる費用負担について協議を行いながら、各選手・コーチの国際経験を積む機会を増やすことができた。しかし、国内レース日程や各所属のスケジュール調整を行いながら試行的に進めてきたが一部選手のレベルと大会レベルがそぐわない状況も生まれた。次年度以降も目的に沿って推進するためにも大会レベル、日程の調整を行う必要である。

## **2-1 オープン、スウィープ種目強化事業**

2023年シーズンにおいては、パリ大会出場権獲得がかかる世界選手権に出場する選手の強化を最優先としつつも、2028年ロサンゼルスオリンピック競技以降の日本代表選手育成のための事業としての次世代強化・育成選手強化を行い、さらなるオープン種目、スウィープ種目の強化を図ることとした。そのための国を挙げた挑戦として、アジア競技大会における男女エイトの派遣、及びローイングワールドカップへの男女フォアの派遣を行い、既に結果が出つつあるスカル種目に加え、オープンカテゴリーにおけるスウィープ種目の今後の可能性について確認することを行った。

長年にわたる軽量級種目を中心とした強化を進めていたため、オープン種目、特にスウィープ種目の強化を継続して実施していく必要があると考える。

## **2-2 オープン種目におけるアジアの強豪国を目指す**

2023年世界選手権及びアジア競技大会において M1x ではアジアのトップレベルの地位を確立した。また、W1xにおいても2023年世界選手権及びアジア競技大会においてアジア3位のポジションとなった。また、アジア競技大会へは男女のフォアを派遣したが、特に女子が中国に次ぎ2位と今後のオープンカテゴリーにおける可能性を示した。今後も、世界へチャレンジを B・C 代表の国際大会への派遣と併せるなど工夫をしながら実施していきたい。

## **3-1 サポートコーチ制度の拡充**

選手所属団体のご協力をいただき、計5名のサポートコーチを派遣いただき、うち3名は国内合宿への継続参加、海外遠征に帯同いただくことができた。この事業の継続により、選手一人一人への代表チーム内及び所属チーム内における継続的なサポート体制が構築でき、且つ未来に向けて次世代指導者育成が可能になると考える。

さらに当初の計画にはなかったが、C代表の主軸となるコーチとしても、選手所属団体のご協力を得て、遠征を円滑に実施するとともに海外遠征の経験値向上も図ることができた。経験いただいたコーチは主要な社会人チームの代表者でもありナショナルチームの活動の理解ならびに今後の強化にもこの経験を活かしていただきたい。

### 3-2 選手のコンディションに対する所属チームへのフィードバック

所属団体との密なコミュニケーションの中で行うことが望ましいと考えられることから、2023年度は所属団体とのコミュニケーションが、強化スタッフ、担当コーチを主として密に行うことができ、そのなかで非常にデリケートな情報でもある選手のコンディション、状況についてもフィードバックを行うことが可能となった。

### 3-3 協会内組織連携

協会内組織の連携は、年を追うごとに円滑になってきているが、それが選手によりより快適なチーム環境を構築できるよう、今後もさらに連携を深められるよう努めていく必要がある。

### 4-1 継続強化

U19世代でのタレント発掘として、高身長、高フィジカルな選手の育成に努めた。またU23カテゴリーからシニアカテゴリーにつなぐ世代については、FISUワールドユニバーシティゲームズ（以後 WUG と略す）の延期により出場要件が多少シニア世代の年齢も含まれる中、WUGへの派遣を行い、海外経験を積み上げることができた。加えて、U23ローイング世界選手権では男子シングルスカル、女子軽量級ダブルスカルがBファイナル進出などこの世代での世界のトップレベルのスピードを肌で感じることもできた。

U19ローイング世界選手権では、目標としていた参加クルーの50%以上の順位の獲得ができず、非常に厳しい結果となった。しかしその中でも、「B1」「B2」を中心とするトレーニングがU19世代の選手間に確実に浸透していることが実感できた。特に代表候補選考（U19SBS）後の数回にわたって行われた強化合宿でのトレーニング、ならびに「代表選手選考評価レース」において、U19ローイング世界選手権本番に向けて研ぎ澄まされていくレース感覚の向上は、「B1」「B2」を土台とするトレーニングの成果だと思われる。

「B1」「B2」トレーニングにより、個々の選手の競技力・クルーのレース戦略は確実に向上することは明らかであることから、ポテンシャルの高い選手の発掘と育成を更に発展させ、1ストロークにおける「距離」を伸ばしていきたい。

さらに、アスリート育成パスウェイ構築に向け日本スポーツ振興センターが推奨する【日本版FTEM】のモデルも参考にメダルポテンシャルアスリート（MPA）及び準メダルポテンシャルアスリートの位置づけのポテンシャルアスリート（PA）制度を設立し、2023年1-2月のMPA豪州遠征、同5月MPA・PA欧州遠征などをタレント育成事業として継続強化を行うことが可能となり、MPAの荒川選手においては世界選手権におけるパリ大会出場権獲得という期待された成果を上げることができた。

#### **4-2 所属団体との定期的なミーティングの実施**

社会人チームとのミーティングを合宿及び遠征期間中の主要なタイミングで行い、意思疎通を図ることができた。また、大学カテゴリーとのミーティングをオンラインで実施し、日本代表チームにおける発信を全国の大学チームへ繋げられるよう努めた。

#### **5-1 アジア競技大会**

2023年シーズン強化方針においては、世界選手権に出場する選手を中心にアジア競技大会へ派遣することを検討しスモールポートセレクションでの選考後、評価を繰り返し選手、種目を決定した。特に欧州遠征での世界とのギャップや8月評価レースの状況も鑑みアジア競技大会のみに強化する種目も決定し強化を行った。

しかし、アジア諸国の目覚ましいレベルアップもあり、当初の見込みよりも苦戦を強いられたことは否めないが、オープンカテゴリーにおけるレベルアップを確認できたことなどの収穫もあった。

#### **5-2 国際レースへの積極的派遣**

1-2において述べた通り、2023年3月に『シニアカテゴリーにおけるナショナルチームの考え方について』(JARA 発 2022-418号)を公表し、ナショナルチームチームをA代表、B代表、C代表に識別しその目的に沿った代表活動を行ったこと。また、各所属チームに代表チーム活動へのご理解・ご協力をいただき、合宿・遠征等にかかる費用負担について協議を行いながら、国際レースへの派遣を積極的に行うことができた。

加えて、U23 ナショナルチームについても WUG、U23 ローイング世界選手権に加え、U23 B カテゴリーとしてフランス海外研修、Holland Beker への派遣を行い、次世代選手強化・育成に繋げることができた。

#### **6-1 新型コロナウイルス感染症対策**

2020年以降の日本代表チームにおける活動から、様々な感染対策方法について学びノウハウを蓄積したことから、罹患者が出た際にも医科学委員会と連携し、トレーニングにおける感染対策、罹患者後のトレーニング再開などもスムーズに行うことができた。

以上